

平成12年度

自分・家族・人との
かかわりあいを学ぶ家庭科学習

一人とのかかわりの意識を育てる家族題材開発の視点一

川崎市総合教育センター 家庭、技術・家庭科研究会議

自分・家族・人とのかかわりを学ぶ家庭科学習

一人とのかかわりの意識を育てる家族題材開発の視点

家庭科研究会議

白川 美智子¹

野村 真理子²

本田 典子³

山川 周子⁴

要 約

小学校6年の家庭科では、「生活時間調べ」の題材を通して子どもたちは家族それぞれに仕事の偏りがあることに気づく。その結果、家族の一員として子ども自身も家庭の仕事を分担することにより家庭生活をより楽しく円滑にすすめ、また、大人になっても生活に役立つというねらいをもって学習が行われてきた。しかし、偏りがあるのはなぜかという問い直しなしにこのような学習が進められていくなれば、偏りはそのまま再生産されていくことになる。家庭の仕事は女、男は家族を養うためにひたすら働くというような固定的な性別役割分業は、日本社会ではいまだに根強い。一人一人の希望や適性が生かされてこなかったために様々な問題が生じてきた。

そこで本研究では、人とのかかわりの原点に家族をおき、子どものアイデンティティ形成の過程に対等な人間関係を構築したいと考え、性別役割分業の視点を取り上げた。その際、漫画やディベート、外国の方の話などを取り入れることによって子どもの性別役割分業の意識を揺さぶりながら現実を見直す学習を行った。子ども自身が家庭生活から感じ取っていることを通して、現実とその背景を探ろうとする姿から、家族の学習の視点に性別役割分業をおく意義を授業の分析を通して明らかにした。

キーワード：小学校家庭科、家族、性別役割分業、生活時間、男女共同参画社会、家庭科教育

目 次

I 主題設定の理由	158	4. 授業評価	163
II 研究の内容	159	5. 検証授業の構想	163
1. 研究の方法	159	(1) 検証授業の概要	163
(1) 研究仮説	159	(2) 題材の目標	164
(2) 研究の視点	160	(3) 学習計画	165
2. 家族の学習構想の視点	160	6. 検証授業の実際	165
(1) 家族・家庭生活に関する子どもの意識調査	160	III 現在までの成果と今後の課題	171
(2) 授業づくりの視点	160	【参考文献】	
3. 実感ある学び	162	【指導助言者】	

¹川崎市立下小田中小学校教諭（長期研修員）

²川崎市立久地小学校教諭（研修員）

³川崎市立南百合丘小学校教諭（研修員）

⁴川崎市立柿生中学校教諭（研修員）

I 主題設定の理由

私たちが、教育を通して育てようとしている子どもの姿は、子どもたちが自分らしく人間として自立していく姿である。社会の変化に対応しながら人とかかわり、共に生きていることを大切に思える人間に育ててほしいと願っている。子どもを取り巻く社会の変化は著しく、情報化、国際化、少子高齢化が進み、それらに伴う価値観の多様化によって子どもたちの育つ環境は大きく影響を受けている。特に社会に位置づく家族は多様化し、一面的なとらえではすでに定義しきれない状況が生まれつつある。

こうした中で、今回の教育課程審議会は、中央教育審議会の“子どもに「生きる力」と「ゆとり」を”との答申(1996年7月)を受け、「家庭、技術・家庭」の教育内容改善の方向を「男女共同参画社会の推進、少子高齢化等」の社会の変化や環境への対応を考慮して「内容の充実を図る」こととした。このため小学校家庭科では、教育課程改善の基本方針の第1として家族の人間関係や家庭の機能の充実という観点から自分と家族のかかわりを考えたり、家庭生活への関心を高めたりして豊かな人間性と社会性を培うことが求められている。

この点について家族・家庭の変化が著しい現在、家庭の何に視点を当てて指導したらよいか、家族をどうとらえたらよいか、家族の領域(現行)は、なかなか指導しにくい面があると思われる。本研究会議でも子どものプライバシーにかかわり、子どもの背後に保護者がいることを意識しつつ、投げかけの言葉に細心の配慮をしながら授業をしていること、子どもにどこまで語らせるのか迷っていること、学習のまとめに家族への感謝を入れることで内容の深まりを感じ「指導した」と教師が満足してしまうことなどが出された。子どもが家族とのかかわりを意識していくための学習が果たしてなされたのか、子どもにとっての家族とは何か、家族の学習でねらうものは何か、家族学習の方向性を探る必要が出てきた。

家族をその構成集団とみるよりも個人と個人のかかわりでとらえる見方が取られるようになってきている現在、子どもが家族をはじめ人とのかかわりをもつ自分を意識していくことは、自己の学びと成長にとって大切であると考え。家族の役割や家族の願いと現実の生活等、当たり前と試みていること、あるいは見えないこと等を家族における自分の位置、自分の思いを意識していく中で気づいていけるようにしたい。そこに自分の今と将来を見通した学びが生まれてくると思われるからである。そこで、研究のテーマを以下のようにおいた。

自分・家族・人とのかかわりを学ぶ家庭科学習

本研究会議では、家庭科の授業における子どもの実態を話題にしてきた。あわせて保護者の教育にかかわる姿勢の変化についても情報を出し合ってきた。

例えば、子どもの傾向の一つとして、立派なことを言うが些細なことができないということもみられる。「水を大切にしよう。」と言いながら出しっぱなしでいることに気づかない。健康なくらしがしたいと願いながら好きなものを好きなだけ食べてしまうなど、知識や願いと実践の不一致が見えるのである。生活経験の少なさから手先の巧緻性が衰えてきていることはすでに言い古されている点であるが、針に糸が通らないことでパニックになる子は決して特異ではなくなっている。子どもの生活を営む能力を身に付けていきたいという想いは、年齢差や性差によって、また、家族の教育方針や、期待感によって異なってくると言われている。子どもが、自分自身の将来像を考えていくとき家族の

影響は計り知れない。家族の姿を問い直しながら、なぜそれを学ぶのか、対象を自分とのかかわりでもとらえたり自分なりに価値付けたりしていく必要がある。

二つ目として、20年程前にすでに次のような指摘がされているが、「子どもたちの多くは、『家族のみんなが楽しく過ごす』ことを、家庭の大切な機能のひとつとして認識している。しかしその内容には、自己中心の享乐的な傾向が強く、健全な家庭建設の意欲や態度との結び付きが薄い。このことは、(中略・・・)家事の役割分担への認識が低調であることから推測できる。また、子どもたちの日常生活に『・・・をしてほしい』『・・・で遊びたい』の言動は多いが、『・・・をしよう』の言動が極めて少ないことから推測できる。」¹⁾ 家族の役割意識がうすく、家庭を担っていく一人であるとの意識が弱い傾向はいつそう加速していると言えるだろう。このことから、子どもにもっとかかわりの意識を育てることによって家族の役割や家族が集まって家庭を作っている意味が分かり、生活を営む力を身に付けたいという意識が育っていくのではないかと思われる。家族における役割意識を考えることは、人権を考える意味で大きな視点となるのではないだろうか。男女共同参画社会の実現に向けて、自立と、男女で家庭を築くという意識を育てることは、家庭科学習において大切なことであると考える。

三つ目として、特に最近の子どもから青年の傾向として、人と直接かかわらない、かかわりを持ちたがらない傾向が見られる。少子化の関係あるいは幼少期から直接ふれあう人が少なくなってきたことも考えられるが、朝食をはじめ一人で食事を摂っている子も増えている。家族が側にいても一緒に食卓につかないことも珍しくない。家族との会話が少ないのは問題だと思っている子が多いにもかかわらず、現実には個人が孤立化していく傾向があるのではないだろうか。衣食住の様々な場面で、人とかかわる自分を意識していくことは小学校期の子どもにとって大切であると思えてくるのである。

家族の役割から見えてくる現実の姿をとらえ、背景にある問題を探りながら男女のあり方を探る学習は大切である。人への意識は、人権への意識でもある。そういった意識を育てる題材を作る意義は大きいと考えられる。そこで、題材を創る視点について検討していくことは、今後の家庭科学習にとっても有意義であると考え、以下にサブテーマをおいた。

人とかかわりの意識を育てる家族題材開発の視点

II 研究の内容

1. 研究の方法

(1) 研究仮説

この研究によって育てていきたい子どもの姿を、目指す子ども像として次のようにとらえた。

- ①自分からよりよい生活を営もうとする子
- ②人と交流する中で人間として高まっていこうとする子

①については、人とかかわりの意識を培うことにより、自分から生活を営む一人として家庭の仕事に取り組んでいくことである。人への想いが、行為をよりよいものへと高めていくことになるのではないか。つまり行為を自己満足に終わらせず、経験を積み重ねることによって得られた自信が、自己をよりよいものへと高めていくと考える。また、日々の生活で人は様々な情報を判断しながら選択し、意思決定している。その選択を促す要素が価値観であると考え。価値は、常に個人の中で更新

1) 日本家庭科教育学会『現代の子どもたちは家庭生活をどう見ているか』家政教育社 1984年 p.130

されていくものであるから、よりよい生活を求めて作り出す行為に人とのかかわりの意識をもつことは、家族がつながる社会へも目を向けた判断ができることになる。

②は、人間は他者とのコミュニケーションをとることで進化してきたと言われている。他者と交流があることで、知を共有しながら自己を意識化していくことができる。社会に位置づく個人や家族であるならば、独善的に生きていくことはよしとされることではない。他とバランスをとりながら調和していこうとする想いを人間としての高まりと考えたい。そこで、仮説を次のようにおいた。

家族学習構想の視点を探りながら、実感ある学びを子どもと教師が共につくっていくことにより、子どもの人とのかかわりの意識を育てることができる。

(2) 研究の視点

研究仮説を検証するための視点を以下に設定し、授業を通してこれらを明らかにしていくことにする。

- ① 家族学習構想の視点は適当であったか。
- ② 実感ある学びを子どもと教師が共につくられたか。
- ③ 表現された子どもの反応をもとに授業評価していく。

2. 家族の学習構想の視点

これからの家族学習を考えていくために、朴木佳緒留「私たちの『家族』学習への提案」鶴田敦子・朴木佳緒留編『現代家族学習論』朝倉書店 1996年をもとに子どもの実態に即して取り上げていく視点を検討した。

(1) 家族・家庭生活に関する子どもの意識調査

- ・調査目的；1982年に日本家庭科教育学会が実施した調査をもとに、子どもたちの家庭生活についての意識や生活行為の実態や傾向を明らかにしようとした。
- ・調査項目；家に帰ったときの気持ち、家庭の機能で大切と思うもの、家庭に望むこと、家庭の仕事に携わっている程度、家庭の仕事の役割分担など。
- ・調査時期；2000年1月
- ・調査対象；川崎市内小学校3校の4年生と6年生、同中学校1校の2年生
- ・調査方法；学校経由による子どもの自記式質問紙調査法
- ・サンプル数；585名(男子307名、女子278名)・・・結果については、別冊参照

(2) 授業づくりの視点

授業づくりの視点として内容と方法の2つの面から4点考えた。

内容面 ①家族学習を性別役割分業を見直す学習とする

方法面 ②子どもの課題意識をはっきりさせる

③子どもが学びの筋をつくる

④討論をつくる

上記の各視点について

①家族学習を性別役割分業を見直す学習とする視点に立つ意味

少し長いですが、論理の混乱を避けるため前述の『現代家族学習論』の一説を引用する。「今日、家族を見る視点はさまざまあり、一定していない。たとえば、家族を家族たらしめる特質として『血縁小集

団』に注目する論もあれば、『家族意識』に注目するものもあり、また、家族は定義づけられないとする論もある。さらには、今日の日本の家族を『崩壊』しつつあるととらえる人々がいる一方で、変化はそれほどには大きくないという見方もある。(中略・・・)つまり今日では、家族を特定の型でとらえたり、モデル化することはできないのである。(中略・・・)家族のあり方や生活のしかたは、『慣習』や『世間体』といわれることがらも含めた社会規範に強く規制されるのが常である。その現実を学びとることなくば、個人は自らの『生き方』を確立することもまた、社会や歴史を創る主体となることも難しいはずである。(中略・・・)今日の日本の家族は専業主婦を生み出すシステムのもとで形成されている。そこでは、家族は、女性(主婦)の自立をこばむものに容易に変化するし、母子密着を生み出し、男性(夫)の長時間労働を生む土台となり、そしてそこから生じる諸矛盾を『愛』の名のもとに覆いかくすものとなる。今日、求められる『家族』学習は、これらの問題を客観的にみつめ、課題解決の方向性を発見できるものでなければならない。(中略・・・)『家族』学習は現存する家族について説明するだけの教育ではないし、また、『家族』のあり方を説く教育でもない。日常的慣習を通してすり込まれてしまっている自らの家族像を相対化しつつ、『家族』についての知見を豊かにし、現実に対応したみずみずしい認識とそれを基盤とした人間的能力を発展させる学習を求めてゆきたい。(中略・・・)定型的な家族像を学ぶわけでないという意味で、カッコを付けて表現した。」²⁾この理論に立って授業構想を立ち上げた。人とのかかわりの原点に家族をおき、子どものアイデンティティ形成の過程に対等な人間関係を構築していこうとする意識を育てる必要があると考えるからである。

② 子どもの課題意識をはっきりさせる

対象としての価値・・・漫画『クッキングパパ』³⁾第1巻「COOK 1」と第2巻「COOK 13」を取り上げた意味

「家族」の授業では、家族についてどう思うかなど、いきなり自分の家族についての考えを話すのは難しいが、映画や漫画などの仮想現実の世界をもとにして性役割などについての考えを聞かれるならば、具体的で発言しやすくなる。話す中で性役割についての自分の考えや想いが明確になり、意識化され見直されるようになるからである。

クッキングパパは、毎回荒岩家の人々の職場や家庭に起こる様々なできごとに即して、料理作りを紹介するものである。夫婦は、共働きで小学2年生の男の子が一人いる。料理、子どもの世話は主に夫が担当し、妻は失敗の連続から料理はほとんど作らない。定刻に会社から一旦帰宅した夫が食事の支度、子どもの世話をし、妻の帰宅後再び残業をしに会社に向かうという日常である。子どもは、父が帰るまで一人で留守番をしているが、一応ご飯炊きや卵焼きなどが作れるという設定である。第1巻の1では、家族の役割分担がはっきりと示されている。第2巻の13では、久々に妻の両親が訪れ、夫がもてなし、妻が仕事帰りに酔っぱらって帰宅するのを、父母が「わたらの頃は男子厨房に入らず・・・」としかる。夫が、「お義父さんの時代はそれが一番おたがいの力を出せたんですよ。今我が家はそんな意味でこれが一番いい型なんです。」と言い、子どもも「僕だって料理は作れる。」と自慢し祖父が黙って聞くというものである。

この点、実践校の子どもの育つ家庭とは大きく異なる家庭生活が営まれている。料理の紹介はさることながら、母親が料理が下手で酔っぱらって帰宅する点で、実践校の子どもにとって生理的になじみにくいキャラクターである可能性も考えられる。ただし、性別役割分業をこれから考えていく導入

2) 朴木佳緒留『『家族』学習の現状』鶴田教子・朴木佳緒留編『現代家族学習論』朝倉書店 1996年 p.73~p.75

3) うえやまとち『クッキングパパ』講談社 1998年第1巻の「COOK. 1」p.3~p.18, 第2巻の「COOK. 13」

的な意味では、内容のわかりやすさ、インパクトの強さ、立場の明瞭さ、読みやすさがあり、子ども自身が、「自分はこんな家庭は・・・」と感想をもち、現実の自分の育つ家庭や、将来、自分がつくっていくであろう家庭像を描きやすいと思われた。単に討論をすると結論は、「食事のしたくは母がやる」になってしまう。子どもは、家庭の姿を見て育っているためそれが当然と考えるからである。立場を違えて考えていく場を通ることにより考えを広げていくことが可能になる。

また、家庭内コミュニケーションを図る意味でインタビューをすることは、家庭の仕事にかかわる男女差についての母親の本音を聞くことができる。「母がやるもの」や、「家にいるものがやる」等、母親自身がそう思っている場合が多い。しかし、嫌々やらざるを得ないと思っている場合もある。そこを見つめることから、男女の賃金格差など制度的な問題などが絡んでいることに目を向けていく学習も可能になる。母の願いは何か。家族の一面にふれる機会にもなると考える。

③ 子どもが学びの筋をつくる・・・問題や現状から、なぜそうなっているのか究明を。

子どもが、「自分の暮らしは〇〇だ。今、これを考える時に何が必要か、何があるといいのだろう。そのためにこれを考えられるようにしていこう。どうするのかな調べてみよう。こうすればもっとよくなる。」という一連の学びの方法を身につけ、理由をはっきりさせながら、課題を解決していく学習である。自分たちの考えたことは本当なのだろうか、なるほどそうだと納得しながら進めていくのが実感ある学びであるなら、調べ考えたことにリアリティを求めるのは大切なことである。

例えば、表やグラフから特徴がつかめるが、どんなことを意味しているのか。ディベートでは、資料として用いてそこから考えられることを述べても、事実在即しているとは言いがたいこともある。実際はどうか、身近な大人や近所の人から話を聞くことにより生活に即した事実が得られ、さらに、自分の家族の考えや我が家の事情が浮き上がってくる事により家庭生活がどのように営まれているのかを知ることができる。地域の人や大人（担任も含め、学校の先生方）に関き取りを行うのは、大人と子どもの視点を顕在化するためと大人を通して子どもが現実と向き合い、社会とつながり、リアリティをつかむための手段でもある。

④ 討論をつくる

子どもにとって学びが意味をもつには、自分を映す鏡が必要である。自分の考えが何からきているか、工夫するとは何か、自分だけで追っていても自己を顕在化することは難しい。全体を包む一つのテーマが必要になってくる。そのテーマの解決に向かって、そこから自分自身のテーマが引き出されてくる。同じ土俵に立ち、友達のような考えにふれると、一つの見方をしていた自分が映し出され、自己を発見し、友達との交流によって自己を広げられるようになる。意見交流には見解の自由が保障されていること、仲間との意見の交換が楽しく感じられる体験をすることが必要である。ディベートは、賛成と反対に分かれるので発言しやすく、また、明確な根拠を要するので、根拠のある発言を促す点で討論に慣れるのに適している。しかし、ディベートは、2つの見解を対立させて際立たせるものであることから、ディベートの後に相手の意見を聞き入れながら話し合いをするなど、討論の形に移していくことが必要となる。今回は本格的なディベートはせず、勝敗を判定することはしなかった。意見が言える楽しさを味わい、派の一員としての仲間意識をもつことを大切にしたいからである。そのため「ミニディベート」と表現した。

3. 実感ある学び・・・伝達から共同へ

実感ある学びとは、「子どもたち自身が、本当にそうだと納得していく学び」⁴⁾ であると言われてるように、子どもが自分の手によって何が真実かをつかみとっていく学びである。学習の意味を子

どもが考えながら進めるものであると考える。そういった学習をつくり出すために、教師はどのような指導観をもつことがよいか考えていく必要がある。

「今の授業の在り方の問題は、子どもが、偏差値や試験の点数と結び付けてしか『学ぶ意味』を実感できず、『学習からの逃避』が指摘されている。人間は、本当にそうなのかと仮説を立てて検討したり、仲間や教師などの他者と意見交流する中で、自分が生きる現実を意識化し、問題を感じたり納得したりして、自分なりの判断の『ものさし』をつくり、また、つくりかえることができる。その過程で、学ぶ意味を実感できる。学ぶ意味を取り戻すには、子どもの学びを現実世界とつなげること、探求過程では、子どもが生活技術や調査・討論等のスキルを身につけつつ、これらを駆使してものをつくったり、現実を調べたり、価値を批判的に検討したり、仲間や地域の大人たちと交流するなど、課題を発見し解決を図る多様な学習活動が必要。また、子どもと教師を共同探求者として位置づけ、取り組む課題や方法、内容を共同決定することも重要。さしあたり、教師の問題提起に異議申立てする方法を教え、そのための回路を授業の中につくること。」⁵⁾とあるように、教師による一方的な学習展開ではなく、指導の意識をもちながら、子どものやりたい意識とどう折り合っていくかが授業づくりのポイントになると思う。子どもがこう伸びるだろうと判断しながら進める学習方法である。教師の意図を明らかにしながら、子どもの育ちを見届けるようにしたい。

4. 授業評価

自分の行ってきた授業をどう評価するか。子どもの言葉や行為から、そこにどんな価値が生まれたか。主に授業作りの視点から自己分析していく。

授業評価の視点

- ・子どもが課題意識をもっているか
- ・子どもが自分の学びに筋をもっているか
- ・子どもが価値をどう築いたか・・・
- 子どもにとっての授業の意味。「ゆさぶり」を受け止めたか。
- ・学習のリアリティをもたせられたか・・・実感ある学びをつくれたか

授業分析は子どもがその子なりの意見をもつことを重視した。

5. 検証授業の構想

(1) 検証授業の概要

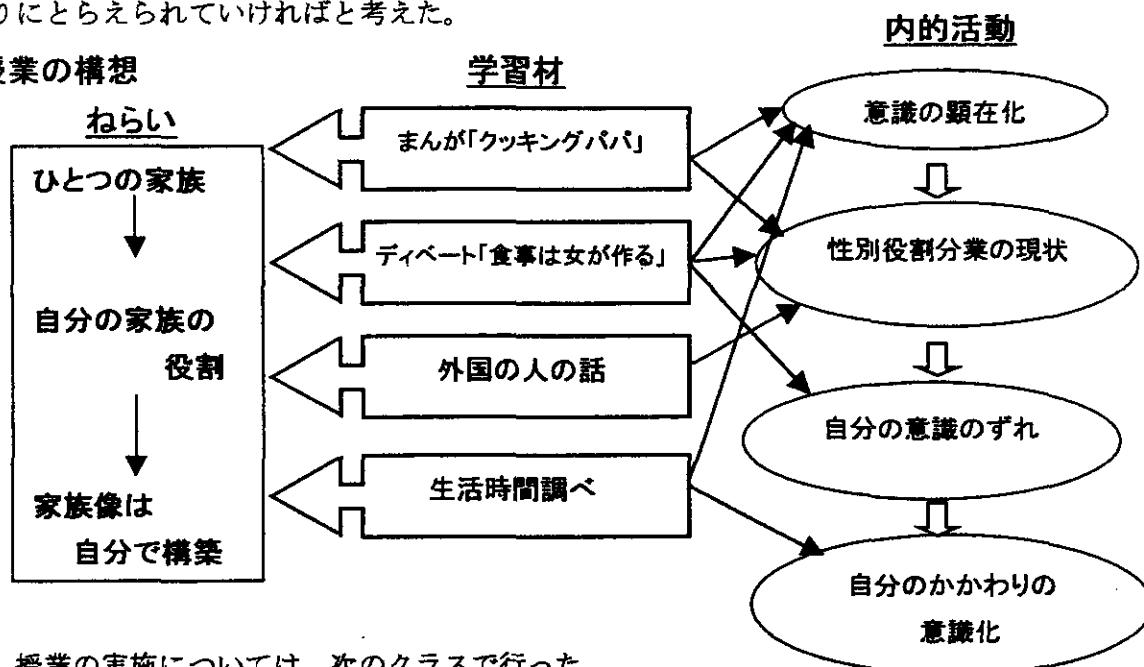
家族の役割は様々であり、決まりはない。一つの「家族」を通して自分の家族の役割に対する考え方を見つめ、家族像は自分で構築していけることに気づかせたい。新学習指導要領において内容の「(1)「家庭生活に関心をもって、家庭の仕事や家族との触れ合いができるようにする。」の項目の中の「ウ『生活時間』の有効な使い方を考え」る内容に性別役割分業を取り上げていく学習を構想した。単に家族の「生活時間」を調べ、そこから、母への家事分担の偏り、父親の長時間労働、子どもの手伝いの少なさなどに気づかせ、子ども自身の家事分担を増やすことを目標にするばかりでなく、なぜそうなっているのかという理由やこれからどうしていったらよいかなど、事実としてとらえ考えていきたいと思った。漫画やディベート、外国の人の話、そして生活時間調べという教材をおくことで子どもはその都度自分はどんな意識をもっているかをはっきりさせながら、性別役割分業の現状を知ったり理想とすることと実際の生活経験からあたり前と思っていることにずれを感じたりして自分を発見しながら、男女のかかわりや家族が一緒に暮らす意味などかかわりに意識がもてるようになると思った

4) 横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校『心の育ちを願って』平成5年度研究紀要 p. 22

5) 山田綾「授業作りの方向」『新しい授業の展開』開隆堂 1989年 p. 4

からである。子どもは、「生まれながらにして一つの家族体験をもち、社会制度や規範の影響を受け、自分の家族体験を肯定するにしても否定するにしても、一定の家族規範を獲得している。それは、きわめて強固な思いであったりする。」⁶⁾とされているが、自分の体験や偏見を見直し、多様な生き方を考えられるようになり、自由に家族像を構築できることを学んでほしいと考えている。自分のこだわりや思いを見つめながら多様な考えがあることにふれ、そこからこだわりをもつ自分に気づき、考えを自分なりに構築していくことができるのではないか。家族や家庭に対する考えについて子どもたちなりにとらえられていければと考えた。

検証授業の構想



今回、授業の実施については、次のクラスで行った。

川崎市立K小学校 第6学年S組 担任 N教諭 男子17名、女子11名、計28名

2000年4月24日から2000年7月14日まで、家庭科授業として7時間扱いで実施した。K小学校は、川崎市中北部に位置し、二ヶ領用水沿いの静かな住宅街の一角にある。担任期間は原則1年間という学校の方針から、当該クラスも4月に担任だけが変わった。男女混合名簿を使用している。男子に比べ女子の方が活発。しかし、全体的に発言が少ないということから、担任は話し合いの工夫を試みている。子どもたちのほとんどがサラリーマン共働き家庭（パートも含め）に育つ。家庭の仕事は家族の協力が得られてもほとんどが女（母、祖母、姉）の分担になっており、それを「普通」と感じとらえている子が多い状況である。

(2) 題材の目標

- 家族の役割は様々であり、決まりはない。一つの「家族」を通して、自身の家族の役割に対する考え方を見つめ、家族像は自分で選択していくことができることに気づく。
- 漫画「クッキングパパ」をもとに家族の役割について意見交換し、家事、特に食事作りを担当するのは誰か、それはなぜかを考える。
- 家族の生活時間から自分の時間の使い方を見つめ、共に過ごす時間の意味や、なぜ男女で家事への参加時間が違うのかを考える

6) 山田綾「学習観の問い直し」鶴田敦子・朴木佳緒留編『現代家族学習論』朝倉書店 1996年 p. 91

(3) 学習計画

題材名 「食事は、だれが作るの・・・今、そしてこれから」 7時間扱い

- | | |
|-----------|-----------------------------------------------|
| ①第1次1時間目 | 漫画「クッキングパパ」を読み、感想を出し合う |
| ②第1次2時間目 | ミニディベート「食事は女が作る」の準備 |
| ③第1次3時間目 | ミニディベート「食事は女が作る」 |
| ④第1次4時間目 | ミニディベートで自分たちが考えたことは本当か、友達の家族、近所の人に聞いたことを発表しよう |
| ⑤第1次5時間目 | 外国の人の考え方を聞いてみよう |
| ⑥第2次1時間目 | 家族の生活時間を調べて |
| ⑦1学期のふり返り | 自分にとっての学習の意味 |

6. 検証授業の実際

- ① 第1次1時間目 漫画「クッキングパパ」を読み、感想を出し合う。 4月19日

「家族のことを考えていくにあたって、漫画「クッキングパパ」第1巻の1と第2巻の13の2編を読んでみよう。」と言う教師の投げかけにより学習が始まった。漫画なので子どもたちの取り組みは意欲的であるが読みの速度に差があるので、まずは、感想を書いてその後交流することにした。子どもたちの感想は、おおむね次のような傾向を示した。

「お父さんは、仕事も料理もできてすごい。」「こんな家庭はいやだ。普通の家がいい。お母さんは料理もできないし、酔っぱらって帰ってくる。」「べつに、こんな家庭はいいと思う。女が料理を作るという決まりはないから。その家庭がそれでうまくいってればそれでいい。」共感や嫌悪が入り交じり、また、その家庭にあった方法でという現実対応型もある。子どもたちがもつ家庭観が無意識に浮き出て来る。これらの感想から「食事は女がつくる」というテーマでディベートをしようという提案。ディベートは賛成反対の2派に分かれて行うことから、どのように分けるかを話し合った。ディベートは初めてという子どもたちである。4月の2週目あたりから国語の教科書(下)の「討論会をしよう」をプリントし話し合いの方法を身につけてきた。テーマに対してどうしても賛成という人と、どうしても反対という人をまず分け、後は感想に書かれた内容からどちらになってもよいという意味でおおよその傾向で分けた。いよいよディベートに向けての資料作りが始まる。

- ② 第1次2時間目 ミニディベート「食事は女が作る」の準備 4月22日

<p>○国語(下)教材「討論会をしよう」のプリントをもとに話し合いへの準備をする。</p> <p>○賛成、反対の2派に分かれる。役割分担として司会者を立て、最初に話す人を決めた。</p> <p>○理論立てのための資料探し、資料作りを行った。賛成派向け、反対派向けに以下の資料を教師が用意した。何をどこで使用したかは授業記録に載せる。</p> <p><資料>・賛成、反対の主な理由を書いたプリント1枚、担任がまとめたもの</p> <ul style="list-style-type: none">・2000年1月に行ったK小学校の4年生87名と6年生82名を対象として行った家庭生活に関する意識調査の結果のグラフ・食事作りを誰が分担しているかなど6年S組、K小学校職員を対象にした調査結果を表したグラフ(主にインタビュー)・世界3大都市圏の共働き夫婦の夫の家事分担率のグラフ <p>さらに、自分だけではよく分からない人は周りの人に聞いておくよう指導した。実際に自分の家庭ではどのように行われているか取材するなど、賛成、反対の理由付けを強固にさせていった。</p>

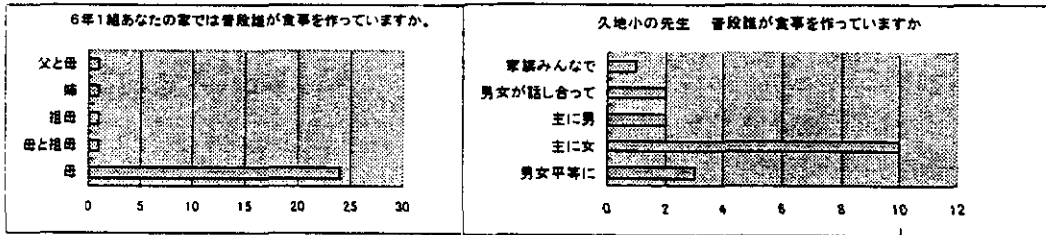
- ③ 第1次3時間目 ミニディベート「食事は女が作る」 4月24日

賛成、反対の2派と司会に全員が別れて討論に入る。

記録についてはVTRにとりテープを起こしたが、聞き取りにくいところがあり省略も行った。話し合いは以下の通りである。

司会 : これからディベートを始めます。論題は、「食事は女の人が作る」です。活発に討論してください。では、最初にそれぞれのグループから1回目の主張をしてもらいます。では、はじめに賛成派のC女3さんをお願いします。

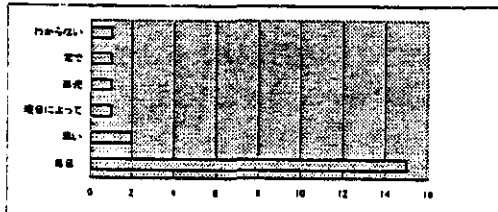
賛・女3 : (「あなたの家では、普段誰が食事を作っていますか。」というこのクラスの人と先生方へのアンケート結果を黒板に貼り。)



このアンケート結果からも分かるように、どちらもほとんど食事は女の人が作っています。それが普通の家だと思います。私も結婚したら、普通の家みたいに私が食事を作りたいと思うし、もし、私がお父さんだったら家に奥さんがいてご飯を作って待っていてほしいから、「食事は女の人が作る」に賛成です。

司会 : では、次に、反対派のC女25さんをお願いします。

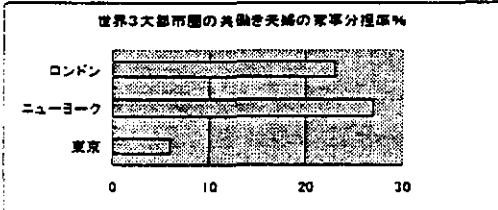
反・女25 : (「あなたのお母さんは仕事をしていますか」のアンケート結果を黒板に貼り。)



この表を見ても分かるように、このクラスのほとんどのお母さんが毎日働いています。これからは女の人も働く時代だから、さっきのアンケートにもあったように、男女が話し合ったり、協力しあったりして食事を作った方がいいと思います。だから、私は「食事は女の人が作る」に反対です。

司会 : では、自由討論に入ります。発言したい人は手を挙げてください。

反・女1 : (「世界3大都市圏の共働き夫婦の家事分担率」のグラフを貼り。)



このグラフを見ると、日本だけ変です。家族一人一人が仕事を分担するのがいいと思います。

賛・男6 : 男の人は働きに出ているから、女の人が家事をするのがいいと思います。

反 : 女の人の人が働きに出ます。

賛・女3 : 女の人の人が仕事をしている人が少ないと思います。

賛・男11 : 仕事をしたいなら、家事をすればいいと思います。

反・女3 : 家事と仕事は違います。

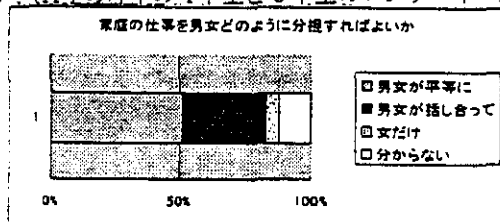
反 : これからは、男も女も料理ができた方がいいと思います。

賛 : 家では女の人が作るべきだと思います。

反・女9 : 今は女の人も働く時代だから、男の人が作るのもいいと思います。仕事がしたいのに、育児や炊事でできない女の人もいます。

賛 : 男の人で家で家事をやっている人は、実際に少ないと思います。

反・女19 : (K小の昨年の4年生と6年生のアンケート「家庭の仕事は男女でどのように分担すればよいか。」の結果のグラフを貼り。)(1999年度 K小4年生87名、6年生82名)このグラフからも分かるようにほとんどの人が男女平等にと思っています。男女関係なしに料理ができた方がいいと思います。



賛 : 実際には平等にできていません。

反・女25 : だから、これから平等にしていこうと思います。

賛・男6 : 日本にはいろんな人がいるから、まだ、男女平等になっていないと思います。

賛・女18 : どちらかが働いて、どちらかが家事をしないと平等にならないと思います。

反・女20 : 両方が効率よくやればいいと思います。女性が必ずやる必要はないと思います。

賛・男11 : 女の人は、自分がやってもいいと思っているから、やっているんだと思います。

反・女12 ; いやだと言えない人だっています。
司会 ; では、作戦タイムに入ります。5分後にまた討論を始めます。

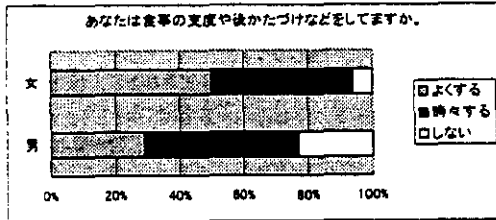
では、作戦タイムを終わります。また、意見を出してください。

賛・男13 ; 仕事の他に家事をやるのは大変です。父は仕事、母は家事をやるのがいいと思います。

反・女12 ; 女の方は仕事にでて、男の人が家にいると言うこともあると思います。

反・男25 ; 家では、お母さんは仕事をしているのに、家の仕事も食事の用意もしています。たまに、お父さんもやればいいと思います。だから、男の方もたまにやればいいと思います。できなければ練習すればいいと思います。

賛・女18 ; (K小のアンケート「あなたは食事の支度や後かたづけなどをしていますか。」の結果のグラフを貼り。)



このグラフから分かるように、女の方は、子どもの時からやっているからできるけど、男の方は、やってないからできないと思います。

反・女1 ; 今まで多いからって、女の人に料理と決めつけるのはよくないと思います。よい家庭をつくるには、協力しあうことが必要だと思います。

賛・女15 ; 男の人が食事を作るって言うと、大変だねって言われます。世間では、男の人がご飯をつくるのになれていません。女の方がつくった方が何事もうまくと思います。

反・男14 ; 男の人が料理をつくれれば、家庭内の会話が広がると思います。それに料理くらいできないと、男の人も一人で生活できなくて困ると思います。

賛・女18 ; 男の方はお金があるから買えばいいと思います。

反・女12 ; お弁当を買ってきたのでは栄養が偏ると思います。

反・女1 ; 女の方がうまくつくれるというのは、男の人に失礼です。

賛・女18 ; 自分の健康管理は自分でやればいいと思います。

反・女20 ; 女の方が家庭のことをするという常識にとられることはないと思います。私も大人になったら、会社で働きたいと思っています。

賛・男11 ; 働きたかったら赤ちゃんを産まなければいいと思います。

反・女7 ; 女の人だけが食事をつくるって決まりはないと思います。

賛・男13 ; 女の方が栄養のことをよく知っているし、男が作ると失敗します。

反・ ; 男の人が小さいときからやっていないのがいけないんだと思います。

賛・男6 ; 男の方は仕事で疲れて帰ってきます。女の方は感謝の気持ちでつくってあげるといいと思います。

反・男22 ; 僕の家はお父さんもお母さんも仕事をしています。それで、お父さんが朝ご飯、お母さんが夕ご飯をつくっています。僕もそういう家庭にしたいと思っています。

反・男14 ; 男の人が感謝の気持ちで料理をつくってあげたっていい。

賛・男6 ; 勉強していなくても、パンぐらい焼けます。

反・ ; 大人になってから、男女関係なく、料理くらいできないと困ります。

賛・ ; 女の方がつくれるんだから、女の方がやればいいと思います。

反・女20 ; 私もお母さんが料理している手順を見て覚えたから、男の人だって覚えられます。

賛・女28 ; 今、お母さんって言ったから、やっぱり女の人に頼っていると思います。

反・女1 ; 男の人ができる家庭だったら、その人に教えてもらいます。

反・ ; 男女関係なく、仲良く一緒につくればいいと思います。

賛・男6 ; 毎日毎日一緒だと飽きてしまいます。

反・女9 ; その家庭その家庭で、自分たちの家庭のかたちをつくっていけばいいと思います。

賛・ ; いろんなこと言っても、実際は女の方が食事を作っています。

反・女1 ; だから、これからの時代は男女関係なくやっていけば、すべてがうまくいくと思います。

賛・女15 ; そんなにうまくいくわけはありません。そんなに簡単に変えられない。現状は女の方が多いのだからこのままやっていくのがいいと思います。他の人から何か言われなくていいと思います。

司会 ; これで今日の討論を終わります。

教師 ; ほとんどの人が意見を言えたと思います。ところで、今日みなさんが考えたことが本当か、実際のところはどうか、今度は近所の人や先生や、友達の家族に聞いてみたらどうでしょう。次の時間は、聞いてきたことを出しあってみましょう。

ディベートの感想には、「意見を言えてよかった」「どんどんはねかえすと面白い討論になる」とディベートでの話し合いを歓迎している雰囲気伝わって来た。ディベート前と比較して、「今の時代

は」という昔を意識した意見や、「実際は」という自分たちの家庭生活を反映した事実に基づいて考えている意見も多く見られた。ここでは、男女平等といっても「男も少しは手伝ってくれないと女が楽になれない」というように、主体は女だがというニュアンスが強い傾向がある。「男も家事のやり方をお母さんから教われればいい」と反対派の女子が言うとすかさず、「母から教わるということは、女がやるのが前提になっている」と賛成派から突っ込まれ、自分がどこまで男女平等についてイメージを持っているか、はっきりさせられる瞬間もあった。女が食事を作るのが「ふつう」で、『クッキングパパ』は、「逆」とか「めずらしい」とか子どもたちは女が家にいることがどこかで当然と思っている。子どもの意識にずれがある。子どもは事実からしか考えられないということを実際立たせた。家族へのインタビューで、母親のほとんどが仕事を持ち、その傍らで家の仕事を仕方なくしているという言葉聞いてきている子どもたちである。事実の重さから、反対派だった子が、「仕事で疲れて帰ってくる父に食事を作らせることはできない」と考えるのも当然かもしれない。そこで、なぜ父の仕事がそんなに長時間なのか、母に家庭の仕事が偏っているのはなぜか、意見の交流を迫りたかったが、時間切れとなってしまった。自分の家がすべてでないということも他人のことを聞くことでつくられていく。ディベートは普段意見を言わない子も言えた。話の流れを聞きながら立場をはっきりさせて考えたことなので発言し易かったのだと思う。

以上、子どもたちの意見が出尽くしたところで、ディベートで自分たちが話し合ったことはどんな事実に根差しているのか、本当のところはどうなのかという疑問を教師から子どもたちに投げかけ、友達の家族や、近所の人に話しを聞いてくることにした。

④ 第1次4時間目 友達の家族、近所の人に聞いたことことを発表しよう。 5月9日
「もっと聞きたい事インタビュー」では、ディベートの中で話されていたことについて家族の考えを聞いてみた。11項目ある。自分の考えたことについて家族や大人の意見を聞いた。(一部)

Qなぜ、昔から女の人だけが家事をしたりしているのか。
Qお母さんは、なぜ結婚してからも仕事を続けなかったのか。
Qなぜ、お母さんだけが食事を作っているのか。
Q女の人だけが食事を作ることに反対なのに、なぜお母さんは、みんなにいやだと言わないのか。
Qお父さんは家事に興味がないのか。
Qなぜ、お父さんは食事を作らないのか。
Qなぜ、お母さんは仕事をしているのに、家事をしているのか。
Qお母さんは、お父さんに不満はないのか。
Q仕事をしながら、料理を作るなんていやにならないか。
Qなぜ、お母さん以外は、家事をしないのか。
Qなぜ、お母さんは、食事をいやがらずに作るのか

お母さんは帰る時間が早いのはなぜ？女は仕事
が軽い？社会の仕組みと
なっていることに目を向
けさせていきたいが、資料
不足と、時間不足がある。
おかしなことが隠されてい
るようだ子どもたちが頭

の片隅に疑問を抱いていってくればよいと思った。討論のための資料探しから気づいた疑問をもとに「生活時間」を調べ始める。例えば、男子が家庭の仕事をしていないのはなぜか、男子自身家事をしない父をどう見るか、母親も働いていてみんなにやって欲しいのに自分しか家事をする人間がいないので仕方なくやるのはなぜかといったことが出されていた。これらのことから、自分たちの生活時間はどうなっているのか、調べてみてはどうかと教師から投げかけた。そこで、家族の1週間のうち特徴的な曜日を選んで(平日、土曜、日曜等)生活時間を調べてみることにした。また、「近所の人に聞いてみよう」は、我が家が絶対という考えを子どもにもたせたくないために、知見を広げる意味で行ったが、日本を絶対視せず相対化してみたいという意味で、地域に住む外国の方に話をきいてみてはどうかと投げかけた。たまたま、この学級には、フィリピン人の母親がいるので、彼女の育った時代、地域のことを中心にお話ししていただくようにした。そこで、子どもたちに聞いてみたいことを話し合わせた。それを事前に送り、大かたの考えを伝えておいた。

⑤ 第1次5時間目 外国の人の考え方を聞いてみよう。

5月10日

外国の家庭についての考え方は、多分に異なっている。日本を絶対視することなくしかも同じ地域に住む人から、自分が暮らしたときのこと等を伺うことで、日本の家庭や自分の家族を意識していけると考えた。Kさんはフィリピンから、Hさんはタイから日本人の男性と結婚することになって日本に来た方々である。流ちょうな日本語でそれぞれの国の家庭の様子を自分が暮らした時代を中心に語ってくださった。日本に来て不思議に思ったこと、守ろうと思ったこと、日本に合わせようと思ったこと、子どもに身につけていること等話していただき、自分たちのくらしや考え方の違いについてとらえさせようと考えた。子どもたちには、Kさんに聞いてみたいことをあらかじめ考えさせておいた。

Kさんへの質問（一部）

- Q 食べ物は、何でしたか。日本とどこが違いましたか。
- Q 日本に来て一番大変だったことは。
- Q 食事の支度は、女の人と男の人とどちらがしていましたか。男女協力していましたか。
- Q 女の方は、どれくらい働いていましたか。
- Q 日本と比べて、女の方の家庭での仕事量はどのくらい違いましたか。
- Q どのような国ですか。
- Q 礼儀作法は、どんな風になっていますか。
- Q 日本のお金1円は、いくらですか。
- Q 日本に来てよかったことはどんなことですか。

Kさんのお話から、子どもたちは世界には様々な生活と考え方があることに気づいていった。終始興味をもって聞いている様子であった。しかし、子どもたちの表情が一瞬固まったとき

がある。それは、「日本は仕事が1番、家庭は2番」と言われた時と、「日本に来てよかったところ」という質問に対して、「よいところは全然ない。」と言われたときだった。それでも何とか「よいところ」を探して話してくださった。日本ってそんな国？何で、仕事が1番なの？子どもたちは、予想外の展開にあわてて日本のよいところを探し始めた。そこから、仕事が1番と言う言葉の奥には、家族のためにという愛情があるんだという願いにも似た気づきが生まれてきたのではないだろうか。だが、現実の生活は誰が担うのか？この問題には十分迫っていない。

⑥ 第2次1時間目 家族の生活時間を調べて・・・自分の場合、友達の場合 6月1日

自分を含めた家族の生活時間を調べて感想を出し合った。自分については比較的厳しい目で見直している子どもが多い。父と母の仕事時間の違い、家族がそろう時間の有無等。父母の仕事時間については、外国の方の言った「日本は仕事が1番、家庭は2番」について黙ってられないという勢いで意見を出し合った。その感想を以下の表の次に記す。

C女9	分かったこと；休みの日、朝食夕食は家族みんなで食べる。普段の日、父は、外で食べる。母の家事が多いので、もう少し手伝おう。休みは団らんが多い。
感想	；普通の日と休みの日はずいぶん違う。父、仕事が忙しい分休みの日はのんびり。母、仕事を持っているけど休みの日は、家庭の仕事があるけど普通より楽。妹、学校ないけど休みの日は習い事。でも自由時間は多い。私も同じ。
C男8	分かったこと；父母は仕事をたくさんやっている。なぜ母、あんなに早く起きるのか。自分は、自由時間が多。仕事はない。きちんと食事は団らんしている。

「生活時間を調べて」感想を出し合った後、感想を書いた。

6月1日

C女1

・私が思ったことは、みんなどこかで働いている人は家族のために働いているのかなあと考えた。もしも、私が大人になって、「家族と仕事とどちらが大切か」って聞かれたら、もちろん「家族」と答えると思うけど、「仕事」と言ってもおかしくないかなと思った。「仕事」と答えたら、家族のことがもういいとか、家族のことを思っていないとかじゃなくて、仕事=家族と考えれば同じことのような気もした。家族のために働いてくれるなら別にそれはいいと思うし、人間が生きていくためには、よく考えてみるとやっぱりお金が必要。仕事=お金=家族と考えればいいと思う。団らんの時間が全くないか、家族そろって食事をあまりしない等というのはだめだと思う。やっぱり家族全員がそろうというのは必要なことだと思う。例えば、お母さんが、小さい子どもの世話をはじめての頃はして、そのときは、お父さんが働いていて、ある程度子どもが小6とか中学生になれば自分のことは自分でできるようになるから、おおかさんも働くっていうのもいいと思う。でも、市民平等がいいから、女の方が月～金まで料理を作るなら、男

の人は土日の休みに作るとか、家事のことは分担してやることを決めておくとか何かそれぞれの家庭で工夫をすればいいと思った。私が大人になったら、ちゃんと私だけが家事をするんじゃないで、男の人もやることを決めてやってほしいと思った。これからは進んでいる「日本」にしていけないと困ることがたくさんあるなあと思った。

C女9

・最初の「女が料理を作る」に賛成か反対かと言うので私は反対だった。それからの感想ではずっと反対だった。しかし、生活時間とか今日6月1日の話し合いでちょっと意見が変わった。そのときやはり、平等が一番いいと思った。それは、先生のお父さんは、遅く帰ってくる人の方が多いということで思ったことがあったから。前に、I先生にインタビューをしたとき、お父さんが遅く帰ってきたのに家事をやらせたらかわいそうだというのを聞いたので当てはまると思った。だから、I先生の意見に「平等」を混ぜればいいと思った。平等は休みの日に父がやり、普通の日に母がやって、子どもも手伝うとしたらいいと思う。それを混ぜた考えが私の意見。ちょっと気持ちが変わりました。

C女20

・今まで家庭科でいろいろなことを調べてみて、外国(フィリピン、タイ)の家庭のことやいろいろなことが分かった。話を聞いていると、日本と違って家庭を第1にしていることがよく分かった。でも、私は仕事が第1と言っても家庭が大切じゃないかと思った。わたしは、共働きはローンの返済や税金を納めるために働いたりしていると思ったし、子どもが小学校から、中学校の義務教育を受けるためだと思ったし、もしも子どもが小学校から大学まで行くとしたらそれなりにお金が必要だと思った。世の中はお金と言っているわけではなく、C女1さんが言っていたように、生きていくためには、義務教育を受けるお金をつくるには、共働きも考え方を変えないとしようがないことかもしれないと思った。

C女18

・フィリピンなどの国は、家庭が1番仕事が2番、日本はその反対とかいうけれど、日本の働くお父さんは、仕事が1番かもしれないけれどその本心は家庭があると思う。自分のためだけに働いているとは思えない。家族がいるからこそ働いているのだと思う。家族みんなのためだけではないかもしれないけど仕事が1番の裏には家庭という言葉があると思う。お母さんが働いている家庭があるけど、それも仕事の裏には家庭があると思う。日本は仕事が1番家庭が2番かもしれないけど裏は反対だと思う。

C女7

・今日まで生活について調べて、家族みんなで家事分担した方がお母さんが楽にできると思う。これからはお母さんの気持ちを考えて行動したいと思う。この学習をしていいなと思ったことは、私の家は、家族で食事をするのがあまりないし、話をするのもあまりできないので、他の人の意見を見て、家族みんなで食事をしたり、話ができると書いてあって、私の家族もみんなで食事をしたかったなと思った。

性別役割分業を見直す視点を入れたことで、生活時間の問題や現状を子どもがつかんできたのではないだろうか。感想交流で、友達同士のかかわりで、子どもたちは、自分の考えのゆれを意識しながら子どもの筋をもって考えている。単に男も料理をすべきだという問題ではないことにも子どもなりに気づいているのではないだろうか。

⑦ 1学期のふり返り

7月12日

・自分にとっての学習の意味をふり返ってみた。以下にその概略を載せる。

C女1	・前まで朝7時に起きていたけど、6時半に変えた。理由は母に言われたのもあるけど、自分でも少し家族に協力しようと思ったから。今まで何もしなかったわけじゃないけどやるのがあまりなかった。
C男5	生活時間 ; これを調べてみて、家事は分担してやった方が自分の仕事が分かっているから協力でいいけど父が仕事をするか分かった。それは家族のためでもある。家族みんなが生きるために働いている。だから遅くまで働いていることが分かった。
C女7	ディベート; この学習をして1週間後くらいに風呂掃除や掃除を手伝うようになった。夏休みにもっといろんな手伝いができるようにがんばりたい。私は、これをやってすごく自分が変わったと思う。
C女9	ディベート; 私は、はじめから反対で今でもそのまま。前よりもちょっと早く宿題をして早く寝ているし、そのおかげで早く起きている。父だって料理を作っているし、私や妹も手伝っている。だから、反対派の意見にそって実行している。これから夏休みなので今よりもっとふくらませて実行しようと思う。
C男13	ディベート; ディベートをやるのは、初めてなんて思って手を挙げることは滅多にない僕が、最後には手を挙げられるようになった。うれしかったし、楽しかった。でも、家庭での効果はない。
C男14	ディベート; どちらかが料理をすると、片方は任せる、つまり甘えと思った。一番いいのは男女で交互にやればいいと思った。会社の都合でできないのは仕方ないけど、できなかった分やらせればいいと思った。一人一人自由な家庭を作ればいい。

C女19	ディベート；「男は家事をやらなくてもいい」と言う人の意見が変わった。それは、やった方がいいという人の何かの一言で変わってくれた。だから、ディベートは、意見が変わらない人もいるけどとても楽しかった。 生活時間；家事は、分担した方がいい。そうすれば母の家事の量も減り早く終わるからそうした方がいい。日本では、仕事が1番で家庭が2番と言っていたけど家庭のためにやっているのだから、1番が家庭だと思った。
C女20	ディベート；男と女と一緒に家事をしていることが少ないけど、でも、もっと増えるといいと思った。日本と外国の差が大きいことに驚いた。自分たちの国が遅れているかなと思った。
C女25	ディベート；これをして変わったことは少し手伝いをするようになった。女だけよりも、男も協力してやる方がいい。私が大人になって家庭をもつようになって、二人で協力してやっていくと思う。ディベートをやっても気持ちは変わらない。

「日本人は仕事が1番、家庭は2番」というKさんの提言に、子どもたちはその背景に家族を大切に思う愛情に気づいていった。しかし、現実の生活には、お金が必要なことも大人の生活状況を見ながら気づいており、ローン、母親の給料が安いこと、小さい子を育てて行くにはお金が非常にかかることなど、実感として気づいている。命の問題もお金が絡んでいることをきれいごとでない現実感をもって感じている。家族の問題は愛情とお金と言い切る子どもたちに、それがどんな仕組みからきていることなのか、追求していただくだけの資料は見つけれなかった。家族のかかわりの希薄さが指摘され、子どもだけの食事の問題もすでに多くの人の知るところである。家族の問題は家庭の機能として子どもを生み育てることの中に愛情問題も含めて考えていけると思われる。ただ、現実問題として家庭を営んでいく金銭の問題は触れておきたいことであった。今後の課題として、子どもの意識している金銭の問題も絡めて家庭の仕事と労働の問題を考えていけるようにしたい。「お金がかかるんだよ生きていくには。」と教えてくれる子どもたちを目の前にしたとき、6年生の子どもたちは教師が考えるより、もっとしたたかに現実を感じ、それを語りたがっているように思えて来るからである。

Ⅲ 現在までの成果と今後の課題

家族学習として、まず性別役割分業を見直す学習をおいた。「性別役割分業によって、家族は性別で固定され、家事は女性のものとなり、男性は家族を養うために、ひたすら働くことになる。本人の希望や適性ではなく、性別によって役割が固定化される不自由さは、様々な問題を生じさせている。育児の責任を一人で背負わされ、育児不安をかかえていたり、働きに出たくても二流労働者である女性は賃金が低く押さえられているため、家庭内の男女平等が難しくなったり、女性が家事を引き受けていることを前提に、男性は長時間労働をはじめとする、仕事中心の生活を強いられるりする。」⁷⁾

自分の家庭観を揺さぶられるような仮想現実の漫画を用いて討論する事で、自己の家庭観や平等感を浮き立たせ、自分とは違う考え方もあることに気づいていった子どもたち。家族の姿を見ながら、家庭ってそうあるのが当たり前と思っていた子どもたちにとって、決まりはないし自分で考えていいということに気づかせていけたのではないかと思う。話し合いが活発になり、友達の考えに興味をもてたようだ。他者の考えに興味をもつことはそこに自己を映し出して自己を問うことになっていく。討論した後にその根拠や考え、資料等が妥当だったのかインタビューしながら確かめていったことで、さらに自分の考えを見つめながら、リアルな家庭の姿を子どもたちなりにとらえていくことができたようだ。ただし、ほとんどの子どもたちが家庭の仕事を仕事として分担しているわけではない。ほとんどやらない子もいる。実際には家事労働や長時間労働を支えながら生活することの現実は

7) 山田綾・天野穂子「現代生活を探求する授業」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第2号 1999年 p.97

理解しにくいと思われる。しかし、ディベートにも頻繁に出て来る「事実だから」それが正しいのだという子どもの論理には、その表面だけを見ては見えないこともあるということに気づかせていたのではないかと思う。外国の方の偽りない話を聞くことで、この学習が現実のことを考えているのだということを感じとっていったと思う。単に家族の団欒を作り、家族や将来の自分のために家事の手伝いをもっとしましょうという学習では、なぜ仕事に偏りがあるのかそれを家族はどう思っているのか追究する事は難しいし、生き方に迫る事はできないと思われる。自分の家庭観をみつめながら、家庭のあり方は多様に考えていっていいということを読んでいったのではないだろうか。

子どもは、指導者の思惑以上に命や金銭の問題も絡めながら自分たちが生きている現実を見つめていこうとしている。自分の家庭の現実を例に出しながら語ろうとしていく子どもたちの姿にもっと考えさせてほしいという想いを感じ取ることができた。

「なぜ、男は家事をしなくてもいい」と思っているのか。この素朴な子どもの疑問から男女の関係や社会の仕組みがうすうす見えて来るだろう。男女共同参画社会の推進を視野に入れながら、子どものアイデンティティ形成の過程に対等な人間関係を構築していく視点をもつ学びを考えていきたい。

本研究を進めるに当たり、適切なお助言を頂きました鈴木敏子先生はじめ諸先生方、各所属校の校長先生ならびに教職員の皆様に心より感謝申し上げます。

【参考文献】

- 鈴木敏子「小学校家庭科における「家族」の扱い方に関する一考察」
「横浜国立大学教育学部教育実践研究指導センター紀要」第7号 1991年
- 落合恵美子『21世紀家族へ』有斐閣選書 1994年
- 鶴田敦子・朴木佳緒留編『現代家族学習論』朝倉書店 1996年
- 吉田和子『フェミニズム教育実践の創造』青木書店 1997年
- 佐藤学「これからの家庭科教育に期待するもの」(日本家庭科教育学会第41回大会講演記録)
「日本家庭科教育学会誌」第41巻第4号 1998年
- 鹿嶋敬『男女摩擦』岩波書店 2000年

【指導助言者】

- | | |
|----------------------|-------|
| 横浜国立大学教育人間科学部教授 | 鈴木 敏子 |
| 愛知教育大学教育学部助教授 | 山田 綾 |
| 岡山大学教育学部助教授 | 佐藤 園 |
| 2000年度川崎市立小学校家庭科研究会長 | 鈴木 伸子 |
| 川崎市教育委員会指導主事 | 中島みどり |
| 川崎市総合教育センター研修指導主事 | 吉田 和江 |